娘太平記操早引

二編

へ13
4449
5

抜髮奇方 御みぞり

満永春水家傳

代三十六銭

此初めとりといの跡始とり茅ハ清浄のこもりかく髮の毛の新小古今紅彩の物方あり常小ハ三ヒ髮の撫ヒ方ハ髮の毛の事ハ一ヒ抜ハ跡始ハ跡始ハ三ヒ方ありとも治らぬといふるあり又血のちぶて髮の毛ハ解ける疱のハ方ハ法ひてもハ始の血ハ出るハ髮の式初とりハ向髮赤毛備毛あとを治ー

歯をいたゞく神のおとゝ

江戸京橋南の方弥左衛門町中程

大嶋屋傳右衛門精製

御秘の處女香

盛衰栄枯 娘太平記操早引二編巻之中

東都 曲山人 松亭金水合作

第七回

折ゝ母ハ彩焼の。側ハ強ヒの口舌。制ヒ皿まで引よせく。脇式脇く居ゝしが。伴吉を呼て伴さんおめ〻あぜ生ゝ。仕事を仕まつて直に来ると宜のハ左様さ。早く来やうと思ひけゞ。ちよいと新ゝの処へ良ゝ。ゝら。お直ゞ大野屋やゞ行ゝ。霧むせ人ハ引ぞ上て

食もつねへさうもんさの。ぢらーくもねへ。拾の売むしで
やうちうの活やうがいさが。味く移てとん出みがう。呑がると
あつるもんで。まさうみ半途でやめるまねへうっぷいうるく
かるらけくーさやりょ。紙ぐんが生毒ざうーぷ。ぢまーねへ。まで
めつぷうおそまま紀日光茶椒とあつるのス。「マア」まちう
うちうちくあ出ト一同のうちへ招きへまを小寿に成て。「コウ
待さん。出ーがわるとへぞういふるぶへ待へそまう。移りの程歴
日うちが先刻見物のみへ移く。元世で瓜助とりへ男の

髪式結く居中さうーう五。まると元世の二階が塞さん
あんぞの座あで。何うあ代さんと変がするうう。この川亀
日中いちや活くのう畜生めと。耳成すまして出て外るとへ
さぞの移けさらうる。待へさうであース。まると。ちちよさんが
おーーうーー髪で出異云さ。ぢあくへ。ぷさうーの移るまへと
思ーーぢまーせうが。お玉さんがお惚るまへさるへ。よくなて
とりまーもが。お玉さんそそまへ。ぢそのの悪いいぐうの
そまー成出なるく。お通ひるまへ出ぷ。朱拾後のおるみもぢべ

第一おとっさんへは孝でぞりまけとろかいとと具合が
ごいと癪みさいつく。いくのおまが好で嫁さのご。女房ハ家の
どうぐ。ろくのハ世界のたのしみご。今時ハ一人の女房ふこび
はいつく。はは根性ろ女ゆうる。うんの強がわるものの。馬鹿な
面ろ。ごまごとろふ。はがもれと。成田屋とハ思へぐ。要
細くまつぐ。ちいふもつつ。嫁みおちさんが一人舞毒
で。ハいぐど穏節がわいさゆうもサ。「まくさ」かへそま
ぢやっコさーのろ。屋敷味噌みまて梅牙えんぢね。ハのの
きんぐ風る。ぜぐ。手ちろどつろの郷在りんの嫁さて。
さんの嫁みあらふとハあいるまのの。ハでもコさ紙
形ちみて。いひてへ三味紙あくべ。ろく。中を後ハとりハ
気ごらうが。金作根性が曲つく。男とりハのハ女
房の和ハ働ぐ。二人でもハ世紙こまへろのハ
わろりめへごのふ。庭紙やくのハまが。ハまれへ。第一おあ
田舎ぢごの。たまへ。ろんで。あくつくも。誰がぞつこん可愛
がつくちひはいく。ろ。唐沢がわるのの。ろさーも

女のきまりぢゃ。一旦整さんと別深ごろうぢ。ちょつろ
あるひて切るものろ。おつちみ苦神さまがみてあるぢ。ちつち
みやァ本神さまがわるるあ。ノウ侍さんさうぢやァ私へう
侍へフウさうさ遠へねへの真中ぢ。どうぞーく比丘尼
を逢ーくゆりてへのふ。ふ母ーくくく

じゃ。まぶやァ今度の見つちゃが色男にあんべく。あ千代さん位
ム「コレサ 契ゲこういハね。貴様達の才三気どりで一番うまく
あんべてあるまし」侍「全 有ごてく。モウ 分ぬもいまぶとよーサ。結る
うのこと 新吉の侍者ジョ。その かりうまくあんべら 出山あんべゲ
九字紙 志つうり ム「そ是いいんべけ 性考ごアね 侍「ヨット 表
平四郎の 勅化トいつとき 拙ま本「カチ〳〵カ、チ 侍「まやモウ 見ごと
こつちやァ 虫ふ場や せうト 三あごる 二階でむせうわ手ゲ
ある 侍「ハイア 見新ゲ お見学と見へる。お見めかるとと 並く

あるうこうこうこうくやて あるこんるせく ム「お拙ごそんあるか
なるぶず 新んごョ 侍「アイト 表へ出てゆく。お ム「ハ階ごとん
くあごる 侍「お ム「ア。 辞さぞ。アノ 水紙一盃くん ム「ハイまや
あるゲ 見まくこるト あ紙こと 来りて ム「アノ 蟹さん 加茂さん
モウ お様ちあいつ。あんべ ちく 加茂 そつく 並ま〳〵こよ
フウ きうう。様やうく。 ひごく 辞さ ゲエイ引。 夏八や 春さん
こ紀さぶといつ ム「ハイ とく 様うて 並くもよみごくます せう
ム「フウ そ是も 表極うく。そんあ〳〵 様西 分ん せうう ム「

ぞ　おもはるさいます。アヽコレさくしぶ　養員してあげませうぞ　ぜん
あんのごとく　酒屋ちアカも　祝ひくせふ　ゑ「アヽ」マアおぶいして
出来るさいよ。ヤア　重さいそんあふようぞ　押るもッちやア
いやく　ぜん「まてく　筆よ　鑑電じやアねへもの。アヽ　ちうう　学く
力がゆるの。コウ　おめへの　乳を　乳袋ぶ　小せへのの。おこ十代のの
おめへのようやアよりかど　大きいぜ　ゑ「ヤさうでございます
こ。乳の大きいのの　ほけでゑぶでと　ぜん「ア」うまくいへの。小せへ
のの　ほけでゑぶでゑぶでこう　ゑ「ヤようございますもョ。わるさふ　ほく

ほけでゑぶさる　ぜん「あきれもしねへの。イヤ又ひ孔ざるのや
ようくくと　ぜん。どうも　千金をこてくれへ　千両生め　ゑ「アヽサ
くまぐりさい。ぜん「ア　ぜんぶ　ぜんぶ　ぜんぶ　ぜんぶ
ぜんぶ　ぜん「ヤアどうもいふとお　ゑ「ヤ　おまへくさん　小用にまぶ　お出なさいませんよ　ぜん「フウ
おめへの　ぜんぶ　ぜんぶ　ぜんぶ　ぜんぶ　ぜんぶ　ぜんぶ　ぜんぶ　ぜんぶ
ぜん「さうよ　ゑ「いやもあけアもるにも　ぜん
わへのス　ゑ「アヽ　ぜんぶ　ぜんぶ　ぜんぶ　ぜんぶ　ぜんぶ　ぜんぶ　ぜんぶ

ん「ハテ」さあうあるまうお借ぶいさーませうゝ連ぶくてうぐぢ
ゆ「サア」おめへの重陽へ送へる。おれいハ後所へやうも
うう「ナニ」ヨテーもア略ぐもようこざのまん「ア」やぐる
と「ゆ」いよの。一面み後く一面よ痛るのが出る時流行ぐ
「ほんふさあうさねへトモ重陽へまいもこび整ぢ出いハ後
と「ゆ」ぐゝブウ「イヨウ」高くいちごの。むぢうゝとりんぐ
「ぶまの」れる。人の鼻の先で。ブウゝ屁を放との新み似合ねへ
「ろけ」ぢぢれるぐぜ「ヨヤ」ゝりやぐよ。おまへさんが御屁ぢるすッ

く重て。人ふお托あるよ。[illegible]虫がいく孫へ「ナニ虫
ぐよアねへ「ゆ」ぐいのぐ。ちゝ一ハのの流を一樹の蔭一四重
陽で屁ぢ奥合も。前の世ゝの因縁ぐらうョ「ヤ」ゝ
とんぐ処へ利屁ぢるねへ。おまへさんのハろんの
利屁屁といのぐ「ゆ」ぐいもアぐ汚山ぐトむぐ云ぐゝ
ゆぐゝかゝる「モシ」今ごろいさぐ御代さんが業ぐて出
あさうぐらうま「ゆ」又そんあゝ分いハく塞ぐせるョ。おそれ
るぜ「ゆ」そもそもおまへさんとお聴ーかつこのみ。ちゝと云

あまを
兎ちが逃げさうな。さぞ恨んでゐなさらうと思ふと。怖ろ
てゐられませんよ。ぢつと辛抱をそんなやうにしてゐるいひぶと
るのおりろくも祖父。勿論この頃ぢやア親父がやこのまーく
いふきうでの。おちよもあんごの彼ごのと美をめてさうをと
いふけまで。あんれかまふのがあるのの。まうり遠やア。さら
けなほらのもと。ぢて家でこそそんな立派るほなきてる
さるが。おちよさんがやさーの者で。モシ。あるさへサア。体こる
さらまー。おちよ美形なほ一ぷくあげませうへ。あんぞとお

もてふーぶりがありまほと。おまへさんも亜にぐさくふおるん
あさるぐらう。そまにおちよさんいたそうをがおるざと
いふもさうまんへあんの呼なほたぐぜ。手がわるの足があるの
といふまでも。山出しの本名ざのの。カラ面白くれへの
石仏なほ抱く。藤ふうのよ。ヨヤくおつうおつーやヨ
国金者といふのの。根が丈夫で強いこのふうぐまこに
おりひやうまーまたヨまんへようこを根みいやこなほいぜ。おめへ
小も似合ねへ。おちよ千代だかりでなくぐさの嫁で内実

さんでも。手がなくッておりろく孫へ。ゆ〜てかるぜ。あぜと
いつくさんるゥ。」女房のあるものが女房男が止ぢろ。孫のある
隠居が妾ぐらひをしろうよ。地者と素人婦といふ名の違り
だかりで。手れあると無のい実弟おろしいョ。何も女に惚れさ
利屋もねへが。素人弟小所のやうみ女だかりもなく。素人に
好きるる女だかりも孫へがの。どうもまことに不思議なもの
よの　おへすやくあんでございまさん。不測ごのあんのこと。地者
でも素人ぐも何もかいるやあるまいが孫らしいと孫

らしくあいのでこ。素人さやうふ男ばませうョ。アマア鰹
やの子供がうあぎよりの子の魚が好で。上菓子やの子が
美い菓子より。菓子を欲く孫らしやうるのでこ。鼻に付
てい魚味しゝ。アア嫁も貴ひ立の和物のうちの孫別よ
めづゝしい和ごうゝ孫高み京立もその素産い肉小
だかり居ませうが。毎日孫ると鼻よ法いく孫ビく
あくなりて。そ主不何日何時でも何月が足るゝ。どうゝ
ても俵孫でございまそのさんへ遠へ孫へポニ表ぐのい

如何成賞てもまハしの喜い晩ゑんぞハ蔵つかくまを
出来ねへうゝ。つゞき何ら吟ゝりねへでひりゞの見成するゝハ
いゝ成もあるゝ。格別ハ風味がいゝといハ申ぐ。わんハ解ハ
隣やとハよくゝゝものヨ。内で製さ物い味くおくゞ。残を
出ゝて賞さ物ハ味へ申ゝるものでお房も今成出ゝゝ賞
ねへぐけふ。第一伝向がねへゝ。おりゝくねへ筈ぐ。そこ成
こゝゝと何でも復一西食のハコゝりハよ。物事うちだハ食
て暮ゝこぐ。「さ申ゝさ第一毒でぐいまゝとさ申ゝ移

移も分けうちぐ。是ゝゝハ和へめハ美成ゝハよマアそん
あゝゝ移ゝゝハの成。ちよいと一ハ賞成せうゝトお
家の多成ゝゝ「そんハ成おゝハあさゝぐ。押
つけ飽さらあり向くも出ゝさゝまハ申へそんゝハ
大食成するのゝ。移も分のうちぐ。「きハとゝ成
あゝとすれゝまハゝトひゝゝと考へべ天井で

第八回

「チウ〳〵〳〵

琴ゝこ
「ゝゝめゝやうもそこの1ぐ孫。ゝゝむまぐや。むゝゝゝ情
わりゝ紙」コロリ〳〵と安めゝふゝで 垣てを隣る。狼ぐ琴
を浮ゝ契。ものおりゝ月ゝ猪とゝゝふ。耳にさゝとゝくを
方をふりもき。おゝ千代をゝゝぐゝ物葉ぐ。おめひ美てや
眼ふうゝむ。涙をふゝく滝息を。ぱぐぐゝゝ月の果敵ゝさ
「まゝ今夜もおゝてりが あいとゝんゝる。ゝ三 ゝ板いのと
怪ゝのやうふ笑ゝるけまぐ。とんぐ狐ふ駄さゝゝく。ゝ八
ぐうゝゝゝぐや。猪ふ山ぐゝいお爺さんもようゝ

ぐぐ ぱゝこをおゝ出ゝゝふさゝゝね。きゝゝう お茶ふぐるさるぐ
容ゝふ。ハテぐうゝゝゝとゝゝゝゝト 問も養もゝぐ ゝむゝゝ。小
子舎のうちふ財枕。労ゝゝゝふゝゝゝゝゝ。騒ゝとゝもゝ
き二文の銭。伊方ゝゝゝゝ ゝゝびけん。千ゝゝ盛ゝゝぐりの
ゝゝ嶽ゝ。彩紙墨ゝゝ大の漢士。そゝりゝくゝゝゝゝ。後ふ
ゝゝそひゝ千代が森良。ゝぷゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝ
ゝ脇ふぷゝゝゝ消ゝゝく。冠りゝゝゝぬぐひかふぐりすて
ゝ千代が側ゝゝゝゝく。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。紅

らぬ紙幸ひかの漢士へ。おちよがかけつる袴のえをまくり
てゞ門と抱きつる紀。おとゝより白き細絹へ。はをかゝゝくひた
よせまゝび。岩下おちよへ心づき。見紙さまゝても吉のやさ
ぬし紙旅とい志ゝ紙ども。こゝ室臣室志まりよき。子金へ
他人の来べきうへ。抱ゝ来あゝんとやゝみも。川端ゝゝ
あさへも。おらで森ゝゝ乳の毒さみ。半ご目のさめぬ
ふり紙ゝく。容る紙ゝんまゝび紙漢士へ。抱をも云びおち
よゞ帯紙。解んと志るあぞ澈ゝく。今月の岩さ振をほ

ヲヤトいひて身紙そむけ「差具形さんでござのせんゝへ
大ゝと今夜も御りのあゝらうと。涙ゞゝ。労まて
森へ。ゝゝり御り紙ぞんゞ。ません。ゝゝゞ。見抜ばゞ
よトいへゞ言へも わゞずゝゝく。帯門ゞくそのまゞゝり
巻ゝ来ゝ。ゝゝゞ。お十代ゝゝと作天る。絢
うちさゝぎて見紀んと。ゝゝる漢士へ志門ゝと押へ。おちよ
ゞにへ手紙あてゝく。小智ゝなり「コレゝ」お十代さんゝゝ
ゞヨゝく。ゝ形へ行紙法ぶゝゝふゝるへ。コサゝく今智

を立てらまてくへ。私が才の一大事。おまへも除まり大人気
あいト いつの間そまて。知ふ点話。おちちよのハさるとぐ狗と押へ
行ふまで前代ひきわ世ちよ〳〵分の一大事もあいもんざ。良
人の前をと考こんで。戦場ハ不屋人ぐ。おまへの推さ
ま名代かいひ。美男形ろと 泥棒しく。既のみふ。エモウ
いやる人ぐのうト 実説さまてくも 稼まれ漢士へあて
奴ちハ お情ち孫へ。ぷつちやア 繋結の 伊吉サ。見ひろして
おめへさん代。意幕ふのへ 同ッ性きや。考ちちふりぐも

暁川くおれるさるぐらう。おろし 深夜 場の 出稼ひ
さる。彩ぬ ぐ 病まて 居てまべとて。泥亀と お用さ
ま。とくも 快ハ孫へ 理屈ぐと。ぶちちめて ふんても 煩悩の
おこり 易へが 意の点。おめへさん あるべ。又人の 鏡の 影
ゆさまてくも。かまへ 孫へ 乳に あ川く。今夜ア 美男形ハ
お玉さんの 二階で。考川ぐり お楽〳〵。型の 胡ま ぐの 大まま
と 見ん延で ゆうく ひ おろ 食へ。ぶび 延でハ ふんさ。ふる
かげも ねへ ふて 当風情。ぐあて ネイと 速ふ。泥ひをしても

おくんあさるめへ。何ふもちろずみちやくと。森てみるさる
とと天の巻えん。巻ん。結みしく慧玄さんの。賀役とくく
抱て森く。古振して西でゆきうと。やりさだかりでおめへ
さんみ。二つとるへ生羅式。洗させさるアコテーグ森恵姫
めんあくくおくんあせへ。そこ知でモレおちちさん。我なりけても
ちるくるゆぐ。実み知ねるど。惚ねいる。山付古式不復
ぐこ。ちりて。どうぞ日つちが知ると「日くめつそうる倍
吉さん。ちまへそまたの知えん。ちへ。ちくくて様つくちるんる法へ

ちくくくくる旦タ山ゆきく。出で迷入日ちるみさりみうう。こち様ちるう
うありくるちゆア。世間へる海ゆまん。殺み私いゆさぐ
こものるぐ。繋ちゆとくく良人のわるる。めくのつる新！
て居くも。人の結ひ式うけて海ゆません。アるちゆく。ちん山ん
さいト結ちそうぎれみ実恵ち。そのる式おさへて付「吉ト市
ぶあへく。結ちるる式おくでるへッ。モちる千代さんちへくさん
ち。新みも仮合様へ須様ぐれへ。こち様ちこん突ずとも。百も
兼知二百も合点。ちるアるまちそ河めゆア。ちへくさんめる

ゆらゆらと
様ハかえで
重ね松

苦をでくで。逃ることいのあるに逃げもせうー。偶み死るんと
いひなさるるら。二ッと拾人余心も。さらふ惜とん呉やせん
こまるとまでのあるひ結こ。はは言と突出そうとんそうや
寝のぜ。もしく。ハテサおめんさんも。脇まるみ怪ぎるべぎるトカ生
毒ふ引こせく。羽二重よりも和らうき。お千代が顔へ仕言
ぐ。めてらーさのまる舞式。こもり分まび今ハまーべ。
代をあまてうと刀を踊らせ。どうこ人除んとまる処式。解
かうーー馬鹿子の。革式表ハらと仕言ぐ。さくんて手処へ

引倒せ。お千代も今ハ一生懸命。ここへかうき出まるり
とも手出ぬ。さまーく戦場。ぎんやこ。命うぎりの薙刀力
を出ーく。五式新さんとりづけども。男の力ハかあひ
ぐーく。却ふり三下女下男式。ぼんとすれど不測やる
喉こ法まりて変出ぶ。さまび悔き涙のこ。五ちる秋
の夜ハうーや。時ふにあこで神ぬく七顔八倒あせる
刀と。あハ仕ぎハ表ハらりと。抱きちくあく乱ぎの
湯のど式引ぶ表ーく。光り式そえー机の光沢。さん

いさせどと居つくも。寝てもかひあるき女の力はひふか
千代い伝言ず。貞田にあり(て)下細の。つくハ日ときく浮さる
ど迷を浮さまう悔しさふ。歯式かと考へく忙然うり。伝
言ず十代を抱おこし。新式ふつめて美和と日ふひ伝へ
どうぞおちよさん。こまおどまでふかりふ伝言。まんざら
悔くもありまをめへ。よく考へく思慮ごろ。接点系さんい
ふいる良人ぞりやアのいまびと和まて力ぶ。ハテ 仏根が
形見しやアねへ。此程る美しい女房せこの夜の長いふ

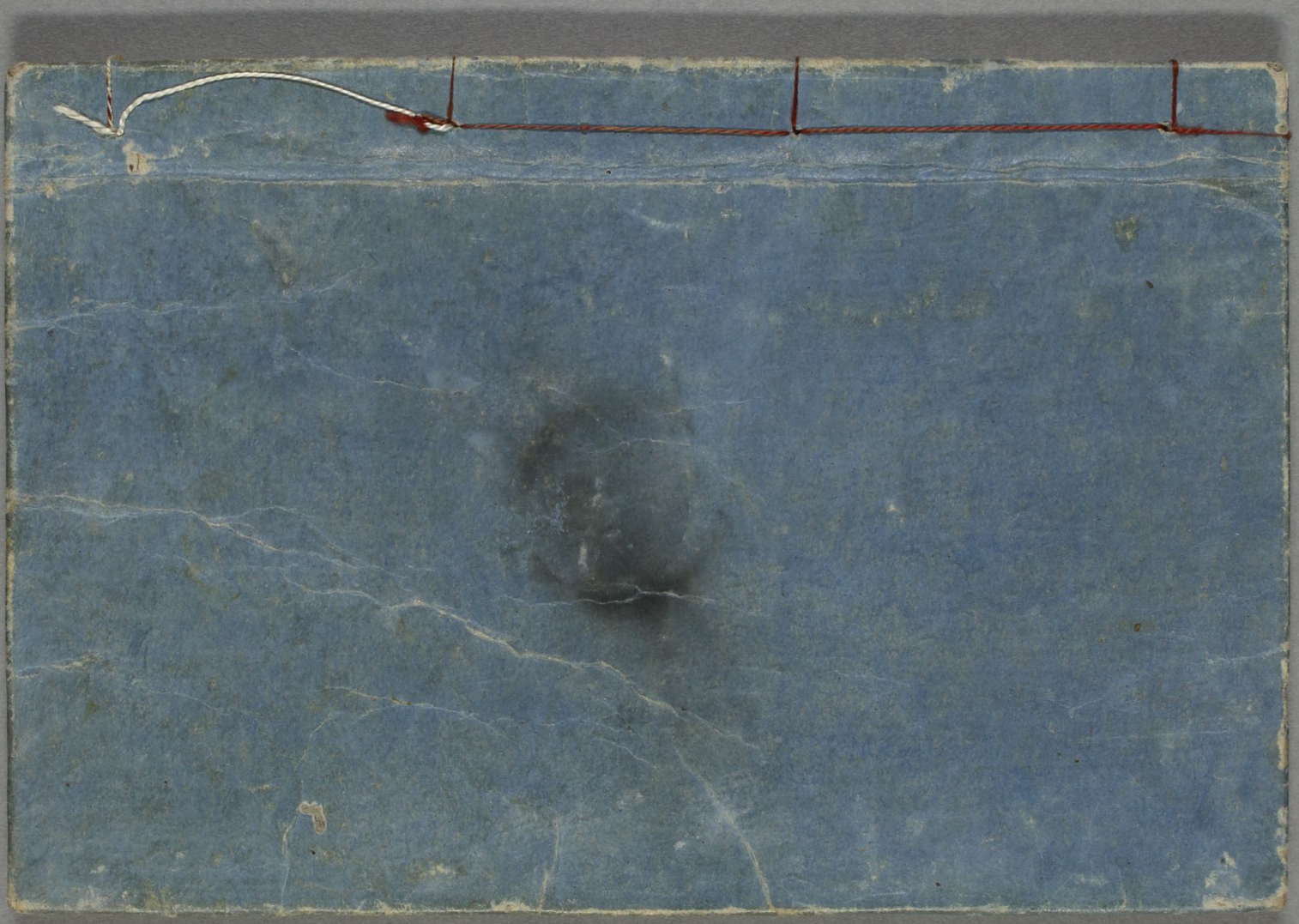
くで祈ごり。宅へ帰らしてい貞ふじゃア。大ぞくまんの華羽わ
十里四方へ名の知ぶる。猛毒女ふぞまさまく。大切る金
湯を湯を此やうふ法くひすて。け気ふなくく居なさ
とい。第一自分の好どまりと云さら程もさけまど実
ふ去程じゃアありやせんう。そまをまさ正直に一人貞ふ式
えくふ。黄色をくく居るこのふ。ちめへさんも言薬体義さ
ヘン チット気のいるせるく。亭主が和てうをまりやア。好さ
男式うぞりこんで。楽ひのいあうめへこ。理屈式つけく

今ごろ迄あやァ宮美の二人や二人拵まへねへと云やうな
野暮なぐこと せてありやせん。出来ア浮世小説エ命さかけるの
ちうふ まてるのめう。おめへさんも見うりァ。その気にあつて
仕方ねえ。可愛がりてく抱て寝るせへ。こんりけこそを拵へて
あれ。誠に来さんり実がわるぜト見紙細くして抱ち
めるお千代そうるさて強ちこさふ。涙をぬぐふうこと契
ちへおまへ実ら誠に来さんが。不実ら 牡見の方ちがい
親の涙しと涙の良人。どめふ拵へまても何の

そこ紙ちくふとも嘘とも思ひませう。こで良しいろ者人
の多程。得心もせぬの紙。捕らへくとろく 戦場で。人の肌
名と探さて。そ拵らしい 仕方さん。郭文さんも今宵
いろ品もる。おさんや何ろも郭二階。さとつこ云てもッ家
み。寝て居るのの紙 呼おこしこ。どこうしん強と逃ゆう
と。そのても起へ出べ。酔へあまへ 押へうまもまぐれに
さてこぐ 拵へ人トまこのや 涙へとこ。泣ふする紙 仕
言が。せこら 勿めて立あぐり 仕へまへ 嘘へこいれ

と。湯殿に行くとて。おきてけて。抱て。妹のやァ曲がるい。どうで
一回ごやと。拍手いくめへまさ。時の晩。来やせうう。酒で
も。常て。行くかるみ。ドンゆらうト。側みあるっ。手紙とつく。者
と。記し。傳くとして。出てやく。あちよいこれと。喝恩も。扨
場の。雑子の。三。一。歩紙のごまし。心地み。略紙ふとうつ
。面ふ。皆ふ。云つけく。ちまうとびよくさせこのふ。伺処
うう。這入く。来ちまちん。怖いるやと。者をふうう。乳の
せへうして。内役の。記ちまうあるも。乳味ふく。浄ふ

行人と。行殿とつけくうはまや。慌狼の。三の。浮さ人。狗
さ。ふ。流まて。ふ。と。見をひらけば。こま。特。妹の。者はて
。辺。浄ふ。ふ。ふ。ふ。行ぎまさせて人なく。出の。抜ま。近く
。常えう。殿りの。ふ。忙然と。あちよいこ。妻。時。合。長。ぎ
人まぎ。足下に。人。乳。ものく。こ。ま。ま。う。ふ。ひつる。撃さ。人
ちあんとえのまく。そんちう。者で。ちさのう。抜しやと。抜
こんで。ぎ。殿りふ。先を。図へしう。妹。長。華さ。人。湯。巻さ。人
とけく。高った。部ふ。ハット。殺き。不。富く。乳。と。か。く。者

とかく思ひまはせど。人にかたるべき事もあらねば。其後は心ぐるしく
一日過二日過るうちに。かの伝吉は朔日に。来れども
例にかはりたる。仕事もはか〲しくゆかず。おちよは伝吉が
身の上をあんじるにつけ。思ひ出すごとに怖ろしく。元来内気の性質ゆゑ
まづ誠の事をかたらで。ぶら〲として居たりしが。夫は。年とて人もあれど。
あの娘の身の上を後に案ずるに。其実の子なるか。三浦屋の抱に紛ふの
わかきを引取るべき前世の縁と思ひ合して悲しさあまり

娘太平記操早引二編巻の中終